新書』もこの年出版されている。

抱節は一八五九（安政六）年のコレラの大流行のあったとき、治療に力を尽したが、自身も感染、八月二十三日に急死した。

温知堂文庫は一八二四（大正十三）年ころ、岡山の難波家では当主が医師でなかったので不要になった蔵書五千部があるというので、当時、倉敷労働科学研究所の暉峻義等所長がこれを購入、馬車で倉敷まで運んだという。購入費五千円だったという。この購入費は大原孫三郎倉紡社長が負担したのであろう。

明治初年の書物が含まれているのは抱節以後の経直（立愿）、立達時代に収蔵したものであろう。温知堂文庫の目録と著者索引は保坂捷子の整理によって一九七八～八〇年にかけて『労働科学』誌に分載されている。

（労働科学研究所）

岡山県医学校旧蔵、田口和美著『解剖攬要』について

中村　昭

『解剖攬要』はその凡例によると、田口氏が「東京大学医学部解剖局ニ於テ数年間独乙国解剖学博士デーニッツ氏ニ親炙シテ実際ニ歴験スル所ヲ輯録シ旁ラ独英二国ノ解剖所ニ参互シ」て編纂し、明治十年に英蘭堂から出版したものである。

これは全一三巻だが、最初の明治十年に出版されたのは一〇巻までで、その後明治十四年には一一巻と一二巻が出、明治十五年に一三巻が出て完成した。この出版がなぜこのように遅延したかは不明だが、明治十年にこれを購入した人は実際上不便だったことだろう。

ところで英蘭堂では、デーニッツ氏よりも前に東校教師として赴任していた内科のホフマン氏と外科のミュラー氏による解剖学の講義録を、山崎元修の筆記によって『医科

全書解剖篇』として明治八年頃から出版を始め、この頃までにだいたい全巻が完結していた。そこで田口氏の『解剖攬要』の不足部分をホフマンとミュラーの講義録で補完して販売するということが行われたように思われる。

これについての一つの証拠となるのが本報告で取り上げるところの岡山県医学校旧蔵の『解剖攬要』である。これは演者が先年東京神田の古書店で入手したもので「岡山県医学校典籍印」という蔵書印がある。また明治十一年七月の日附で三浦敏という者の所有物である旨の墨書がしてあるが、この時点ではまだ岡山県医学校という名称の学校はないので、この後明治十三年以後に岡山県医学校の蔵有に帰したと思われる。

しかし同校の後身である三高医学部や岡山医学の蔵書印は捺されていないので、それ以前の時期に外部に流出してしまったものと思われる。

それはともかくとして、この『解剖攬要』は全巻揃ではなく、一、二、三、七、一〇の各巻の刊本と一一巻以後は装幀は『解剖攬要』と同じだが中味は『医科全書』の当該部分の写本で補ったものになっている。しかもこの一一巻の表紙の『解剖攬要』の題簽の余白に朱色で『医科全書』と刷ってあり、合成したものであることを示している。

そしてこれらの七冊の本の表紙にいずれも「一八七七」と「独、忽布満」の二枚のラベルが貼ってある。これはこの蔵書の整理係がしたことと思われるが、「一八七七」とはこの本の刊行年である明治十年を意味し、「忽布満」とはドイツ人教師ホフマンのことであろう。

この『解剖攬要』は田口和美の編著であることは明記されているのだが、一一巻の本文の始めに「東京医学黌(ママ)(黌)教師独逸医官忽布満氏口授、山崎元修筆記」と書かれているので、全体がホフマンの著作とされてしまったのだと思われる。

最近でも、田口和美の『解剖攬要』は『医科全書』の内容を併せて編集したものでオリジナルな著作ではないと論じている文章を見たことがあるが、それはやはりこういうことを誤解したのであろう。このような形で当初の『解剖攬要』を弥縫することはおそらく田口氏が意図したことではなく、英蘭堂がしたことと思われる。明治十五年までには残りの部分が出版されて完全な著作になった。

今回の医史学会が岡山大学で催されることにちなんで、現岡山大学医学部の前身である岡山県医学校にまつわる話題を提供する。

（神奈川県総合リハビリテーション事業団
七沢リハビリテーション病院）

第三高等中学校医学部の講義（第二報）

大滝紀雄

私は昭和四十六年四月、第七二回日本医史学会総会で、表題の第一報を報告した。

明治初期より中期にかけて医学校の数はかなり多く、明治十二年には四八校に及んだ。明治二十年以降医学校は淘汰され、十数校に減少した。明治十九年（一八八六）四月勅令により中学校令が布かれた。全国を五区に分け、各区に一つずつ高等中学校が置かれた。第一から第五までの高等中学校は千葉、仙台、岡山、金沢、長崎にあった。

明治二十年八月には文部省告示によって、それぞれの高等中学校に医学部が設置されるようになった。したがって第三高等中学校医学部は現在の岡山大学医学部の前身である。岡山では明治三年医学館が開館、その後岡山医学所、公立病院、県立病院などと改称されたが、明治十三年岡山